The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	理論と現実の間 : 蠟山さんのこと
Author(s)	香西, 泰
Citation	国際公共政策研究. 2004, 8(2), p. 169-171
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/6022
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

理論と現実の間—蠟山さんのこと

内閣府経済社会総合研究所長
香　西　　泰

蠟山さんの名前を私が印象付けられたのは、浜田宏一教授とお二人で書かれたリスク・アセットの選択についての英語論文を読んだときだったと思う。実にシャープな、すっきりした理論展開で、私のようにもともと近代経済学を公務員試験受験用に勉強した経歴の持ち主からみると、自分と同世代の日本人研究者が国際的な舞台でこんな立派な理論的業績をあげていることに、感嘆と羨望を禁じえなかった。これで私には若くて優秀な理論経済学者という蠟山さんのイメージが植え付けられた。

なおこの論文のことは、印象だけが残っていて記憶は確かでなかったが、最近、浜田教授にお伺いして、それが Hamada, Koichi and Shoichi Royama, Substitution and Complementarity in a Choice of Risky Assets, in D. D. Hester and J. Tobin (eds), (1968), *Risk Aversion and Portfolio Choice*, Cowles Commission Monograph No. 19, New York; Wiley, pp. 27-40 であることを確かめることができた。これには蠟山さんの修士論文の成果が含まれているとのことだった。

実際に蠟山さんの謦咳に接したのは、当時私の勤務先だった経済企画庁で、蠟山さんを囲んでお話を聞いたときであったと思う。そのときのトピックは、市場を創るにもコストがかかるという議論で、広くは市場と組織の関係がテーマだった。ポートフォリオ・セレクションもそうだが、市場と組織の関係も当時は（少なくとも私には）先端的な話題で、フレッシュな問題意識が魅力的だった。

だがそれより記憶に今も鮮烈なのは、蠟山さんが話しのはじめに「皆さんは実務家だから経済理論は抽象的で現実離れしていると思い込んでいるだろう。しかし理論は、理論家が思うほどには現実的でないかもしれないが、実務家の皆さんが想像しているよりはずっと現実的だ」という意味のことを語られたことだ。それに付け加えて「理論と現実の距離を正確に測ることが大切だ」ともいわれた。深い理論探究と鋭い現実凝視が結びついた蠟山さんならではのコメントだったと思う。

蠟山さんの趣味ではないかも知れないが、何時の間にか私の頭の中では「現実的なものは

理性的であり、理性的なものは現実的である」というヘーゲルの命題が、蠟山コメントの私なりの解釈に紛れ込んでいるようになった。ヘーゲルの命題の前半は、ひどく現状擁護的、保守的なニュアンスを含んでいる。しかし「正しい理論は現実に適用可能だ」という後段には、「理論的に正しい方向へ現実を導く」という改革的、革命的な意味も含まれる。蠟山さんも理性的改革への熱い情念に欠けていなかった。

蠟山さんとはその後、村上泰亮先生を中心とした「政策構想フォーラム」などで個人的にも親しくお付き合いさせていただいた。そして私はたびたび、蠟山さんが鋭い理論家でありながら、現実問題にも並み並みならず関心を持ち、強い正義感をもって問題を提起し、しかも理論的にこれを解こうとしておられる場面を見聞した。そしてそのような場合に、理論と現実の距離を冷静に測り、その上で現状打開の論理を明確にすることは、蠟山さんの学問と人生のひとつのテーマであったことがよくわかった。

蠟山さんの言葉は、蠟山さんのお仕事を規定していただけではない。私の生業（なりわい）にも大きな影響を与えた。私が役人や評論家として暮らしながら、身のほど知らずにも経済理論をかじって、それを現実の経済問題の理解に少しでも生かそうとしてきたのは、他にも原因はあるにしても、先の蠟山語録に痛く感動したことによる面が小さくない。私も蠟山さんの理想に共鳴するところがあったのだ。ただ実際には、実務家の前では「経済学の理論では」と講釈し、理論家の前では「実務の世界では」と煙に巻く、イソップ物語のコウモリまがいの「デハの守」的な私の身過ぎ世過ぎは、蠟山さんの言葉の高い志を歪曲し、矮小化し、堕落的に俗流化するもので、まことに恥ずかしく申し訳ない。いまとなっては不肖の友としてご海容願うしかない。

私が日本経済研究センターに在職中、蠟山さんからハーバードのロー・スクールのメンバーと小規模の国際シンポジウムを開くので、センターも協力してほしいというお話があった。私も興味を持って、センターで事務局役を引き受け、大阪で会議を開いた。会議の終了時に海外の参加者から、当時ちょうど開かれていた花の博覧会を見たいという希望が出て手配に走り、希望を叶えることができて、おおいに感謝された。

このようなプロジェクトの問題のひとつは、いうまでもなく資金調達である。蠟山さんは、他人に仕事を頼むだけではなく、自分でも気配りを怠らない人だった。準備期間中に海外に出かける用事ができた蠟山さんは、私に宛名を書いた紹介用の名刺を複数手渡し、この方々には会議の意義をお話し、寄付を頼んでおいたので、海外旅行中の蠟山さんに代わって私がたずねていって、資金を集めてほしいといわれた。廻ってみたら皆さんが「蠟山先生からお話は聞いています」ということで、その場で振込みを快諾して下さった。私が希望の金額を持ち出す（ファンド・レイジングで一番スリリングな場面）こともなくてすみ、それで前もって蠟山さんから聞いていた見込み額を下回る方はいなかった。蠟山さんが実務の世界の

人々にも、いかに信頼され、いかに人気があるか、思い知らされて、うらやましかった。

この調子だから、蠟山さんが民間の研究所を主宰することがあったら、私などよりはるかに優秀な成績を収めただろう。学問でも実務でも卓抜していた蠟山さんだった。それでも蠟山さんは大学教授で社会的発言はボランテイアとして行われたのに対し、私がひところ民間研究所で有給の職を得ていたのは、絶対優位による独占ではなく、比較優位に基いての分業・特化にも利益が存在するからだろう。そう考えると、比較優位理論は「強者の論理」だというのは間違いで、むしろ弱者にも「どっこい生きる」可能性があることを説明する暖かい理論なのだと納得される。

優秀で誠実で魅力的で健康そうだった蠟山さんが、私より先に亡くなられた。駄弁を弄してその寂しさを埋めようとすることしか、いまの私にはすることがない。